論文の内容の要旨

論文題目　学問としてのダンスの歴史的変容 : ウィスコンシン大学マディソン校のダンスの 100 年

氏名　木場裕紀

本研究の目的は、なぜアメリカ合衆国（以下、アメリカ）の高等教育機関において芸術系のダンス・デパートメントが設立されたのかを、高等教育機関内の要因に着目して明らかにすることである。

第 1 章では本研究の目的及び背景について述べた。アメリカの高等教育機関においてダンスは女性の身体教育として普及していった経緯がある。その根底にはあらゆる人のダンスを通じた全人格的な発達を目指すアマチュアリズムの考え方があった。1960 年代になるとダンスを身体教育から切り離し、独立したデパートメントや芸術系のデパートメントに位置付ける高等教育機関が数多く見られるようになるが、これらのデパートメントではプロの上演家・振付家の育成が目指された。

なぜそのようなダンスの芸術化やデパートメント化が起きたのかについて、先行研究では、連邦政府の芸術政策・教育政策や高等教育機関で教鞭をとるダンス教育者たちによる専門団体の設立及びそこでの活動にその要因を求める説明が行われてきた。しかしながら、そのような説明では、上述したアマチュアリズムとプロフェッショナリズムの間の価値対立を捉えることができず、また 1980 年代以後も身体教育デパートメントにダンスを位置付ける高等教育機関が一定数存在したのはなぜなのかを説明することができない。

本研究は高等教育機関を取り巻く社会的政治的要因（外在的要因）のみならず高等教

育機関内部においてダンスを専門とする教員の活動に着目することが必要であるとの立場から、個別の高等教育機関のダンスの位置づけ及び役割の変容を検討した。事例としてウィスコンシン大学マディソン校を取り上げた。同校はマーガレット・ドゥブラー（Margaret N. H'Doubler, 1889-1982）の尽力によって 1926 年に世界初となるダンス専攻が設立されて以来、身体教育系デパートメントの下位プログラムとしてダンスが位置付けられながらも、近年（2010 年）になってようやく独立したダンス・デパートメントが設立された稀有な事例である。

第 2 章ではこれまでの高等教育機関におけるダンスの位置づけやその内容について述べた先行研究を検討し、個々のダンス・プログラムの位置づけや役割の通史的な変容について明らかにした研究が欠落していることを指摘した。そのような変容を分析的に捉えるために、高等教育機関におけるデパートメントやプログラムに関する組織的研究を検討し、社会的政治的要因に影響を受けながら大学内外で活動を行う教員の興味関心や活動に着目した分析モデルを構築した。

第 3 章から第 6 章にかけては、構築したモデルをもとに、ウィスコンシン大学マディソン校におけるダンスの通史的変容を 4 つの時期に区切って記述した。ドゥブラーが中心となって 1926 年にダンス専攻が設置された当初は、あくまでも身体教育プログラムに新たに付加された内容としての取り扱いであり、ダンス・デパートメント設置の議論にまでには到底至らなかった。ドゥブラーの引退後、ウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムは 1960 年に応用専攻を設置するなど、ダンス教育者育成に加えてプロの上演家・振付家の養成という新たな役割を担うようになった。1960 年代後半には、連邦政府の文化政策やダンス専門団体での議論に触発されて、ウィスコンシン大学マディソン校のダンス部会でもデパートメントとしての独立が目指されるようになったが、予算や施設が確保できるかが不透明であり、また、テニュアを持った教員が少なく、十分な運営ができるとみなされたなかったことが原因となって、デパートメントとしての独立は断念された。1972 年にタイトル IX が施行され、それまで別々に運営されていた男女身体教育デパートメントの統合の議論が進むと、ダンス部会の教員たちは統合デパートメントに残るのか、ダンス・デパートメントとしての独立を目指すのかの選択を迫られた。ダンス部会の教員たちは前者を選択し、予算や独自の人事昇進システムの保持を主張した。統合デパートメントの名称は「身体教育・ダンス・デパートメント」となり、名称に「ダンス」を盛り込むことに成功したものの、統合後はダンス専攻の学生以外の学生がダンスを学ぶ機会が減少し、男性のデパートメント長のもとでの運営に不満を覚えるなど、統合前の期待とは異なる現実に直面した。1980 年代には、芸術家としてのキャリアを持つ教員がリーダーシップをとって独立したダンス・デパート

メント設置の議論が進められるが、学生数の減少や教員間の不仲が原因となって新規入学生の受け入れが停止され、計画は頓挫する。人事を刷新し、1991 年にダンス・プログラムの新規入学生の受け入れが再開されてからはカリキュラム改革を行い、プロの上演家・振付家の養成という目的を強調するようになる。さらに、2007 年に新たな教員を迎えたことをきっかけに、ダンス・デパートメントの設置の議論は加速する。最終的には独立したデパートメントとして十分な運営を行えるだけの人員、すなわち「クリティカル・マス」が形成されていることが認められ、2010 年 4 月にダンス・デパートメントの設立が承認された。

第 7 章では本研究の知見を整理するとともに、本研究の貢献と課題について述べた。アメリカの高等教育機関において芸術系のダンス・デパートメントが設立されたことについて、先行研究では高等教育機関の外部に存在する社会的政治的要因のみに依拠した説明を行っていたが、むしろ学問的志向性やテニュアを持った教員の人数といったダンスを専門とする教員の在りようにその要因が求められることを本研究は示した。すなわち、高等教育機関外の要因に影響を受けながらも、高等教育機関内部においてダンスを専門とする教員（団）がダンスの学問的独自性や大学において果たすミッションの再定義、テニュアを持った教員の確保を通じて、必要なレディネスを整えたときに初めてデパートメントとして独立し得たことが示された。

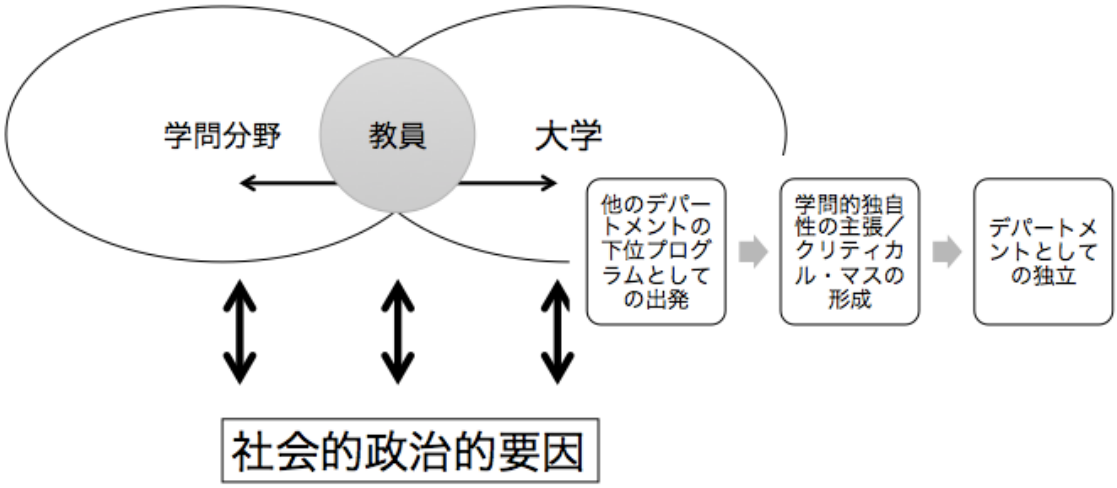

図　大学内におけるデパートメント設立までの過程

また、ウィスコンシン大学マディソン校のダンスの事例を通史的に検討することによって、ドゥブラーが確立し同校で花開いたアマチュアリズムとしてのダンスが大きく後退したことを本研究は実証的に示した。アメリカの高等教育機関において身体教育デパ

ートメントに位置付けられたダンスは、20 世紀後半から 21 世紀にかけて芸術系のデパートメントや独立したダンス・デパートメントの中に再定位されたが、その過程でダンスの学問的独自性として上演芸術としての側面が強調され、アマチュアリズムとしての意義を強調する従来のダンス・プログラムからは質的な変容を遂げていたこと、すなわち「身体教育から芸術への長く緩やかな移行」を遂げていったことを本研究は明らかにした。本研究が示した史的事実からは、アマチュアリズムとしてのダンスとデパートメント構造を持ったアメリカの高等教育システムとの折り合いの悪さが示唆される。ドゥブラーが構想したような、すべての人がダンスを手段として全人格的な発達を目指すというアイディアを実現し、幅広いバックグラウンドを持った人々がダンスを学ぶ機会を保障するためには、「学ぶべきダンス」や「ダンスを学ぶことの意味」の狭隘化を伴うダンスのデパートメント化を進めるのではなく、リベラルアーツ・プログラムなどのより広い枠組みでダンスを教えるという方策も考えられる。

本研究が示した、新たなデパートメントの設立にあたっては教員集団のアイデンティティ戦略と「クリティカル・マス」の形成が重要であるという知見は、ダンスのみならず、他の学問領域においても適用できる可能性があり、デパートメントの構成員が著しく少ない事例を選んでその設立期を検証する等の方法で、デパートメントの設立に関する高等教育研究に理論的な貢献をすることができると期待される。また、本研究は単一事例研究であるため、「身体教育から芸術への長く緩やかな移行」が他の高等教育機関のダンスでも観察されるのかを検証し、もしそうでないとすればどのような要因があるのかを明らかにする必要がある。また歴史的アプローチをとったことに伴う資料的制約も本研究の限界として指摘せねばならないが、新たな資料の発掘が待たれるところである。